

単元名 「Welcome to Japan.」『日本の文化』(We Can2 Unit2)
 授業者 本山 進 教諭

単元計画 (第6学年)

- ◆新学習指導要領 領域別目標 (3) 話すこと「やりとり」ウ
 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり、質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。
- ◆【CAN-DOリスト形式の学習到達目標 第6学年 話すこと【やりとり】】
 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり、質問に答えたりして、伝え合うことができる。
- ◆【単元ゴールとしての言語活動】
 高知に観光で訪れる外国人に、日本の文化のよさについて伝える。

【単元目標】

- 日本の行事や食べ物などについて、聞いたり言ったりすることができる。(知識及び技能)
- 日本の行事や食べ物、自分が好きな日本の文化について伝え合ったり、例を参考に語順を意識しながら、書いたりする。(思考力、判断力、表現力等)
- 他者に配慮しながら、日本の文化について伝え合おうとする。(学びに向かう力、人間性等)

【単元指導計画 (全8時間)】

時	学 習 活 動
1	◆単元ゴールを設定し、新しい表現に慣れる。
2	◆日本の文化を紹介する時に使いたい表現を知り、慣れ親しむ。
3	◆日本の食べ物や行事を紹介する時に使いたい表現に慣れ親しむ。
4	◆リーフレットを使って、紹介したい日本の文化についてさらに詳しく伝える。
5	◆相手を意識して、日本の文化を紹介する。
6	◆ラーゴの高校生に日本の文化を紹介する。
7 (本時)	◆他者に配慮しながら、日本の文化について伝え合おうとしている。 ① Omiya Talking Time ② 「Small Talk」 (児童が初めての人に話をする。) ③ Today's Goal ④ 【Activity 1】ラーゴの高校生との交流をもとに、自分の伝えたい日本の文化を紹介する。 ⑤ 【中間交流】 活動を振り返り、気付いたことや感想を出し合う。
	⑥ 【Activity 2】確認したことを使って表現し合う。(参観者) ⑦ 振り返り
	◆海外からの観光客に日本の文化を紹介する。



模擬授業

参加者より

・既習の表現の把握 (児童の実態把握) を基に言語活動を展開する (言葉をください、話し合うことで表現を再構築する) ことを学んだ。

- ・言いたいけれど分からない表現を、指導者がすぐに教えないで子供たちが持っている表現でつくっていく方法は、子供たちの言いたい気持ちを大切に方法だと思った。日々の授業づくり、学級づくりなくてはできないことである。
- ・単元における逆向き設計での授業づくり、単元構想が必要であると改めて感じた。単元の目標と過程、ゴールが目的、目標に沿って組まれているか確認し、指導と評価の整合性がある授業づくりに取り組んでいきたい。
- ・本単元の目標が「やりとり」なのか「伝える (発表)」なのかという捉え方によって、全8時間の内容が大きく変わってくる。単元目標を実現するための8時間となっているのか、各時間で何ができるようになるべきなのか、児童にとってスムーズな流れとなっているか等、児童の実態と照らして見直すことが必要だと感じた。
- ・知識や技能がなければ、思考・判断・表現はできないことを改めて学んだ。

単元構成のポイント

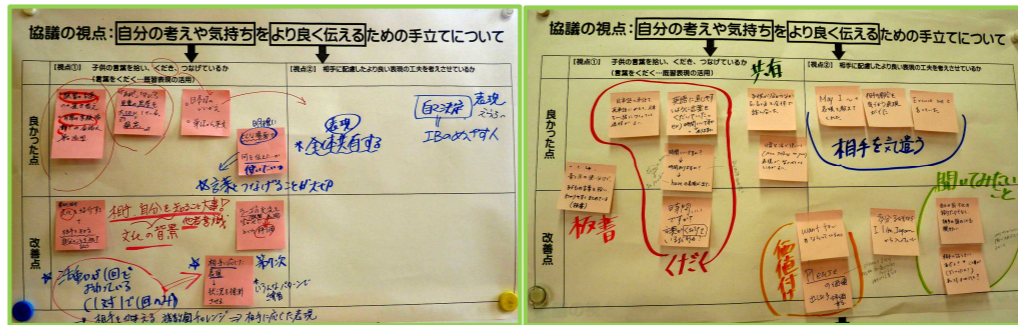
- 【児童の実態 (課題)】
 ↓ 英語の授業を楽しみ、日本の文化紹介にも意欲的だが、自分のことや意見の発表には消極的な面が見られる。
- 【解決に向けた手立て】
 ↓ 日本の文化の良さについて、自分の考えや気持ちを含めて伝える活動を設定する。
 ・異なる場面・状況で言語活動を繰り返す。
 ・既習の表現を組み立て、自分の伝えたいことを表現させる。

言語活動の質を高める



協議内容

- 【視点①】子供の言葉を拾い、ください、つなげているか
 ・子供の思考を大切にしており、探究につながっている。
 ・子供の声を拾い、表現を確認することで学びを共有している。
 ・「ください」手立てが弱く、教え込みになっているのではないか。
- 【視点②】相手に配慮したより良い表現の工夫を考えさせているか
 ・具体的な場面設定があり、前時との違いを明確にすることで相手の立場に立って考えさせていた。
 ・話し手だけでなく、聞き手 (観光客役) の困ったことや聞きたいことも出させてはどうか。
 ・より良い表現を授業者が明確に持っておくことが必要。



模擬授業の様子



①前時 (ラーゴの高校生) と次時 (観光客) との場面・状況の違いを明確にし、既習を基に必要な表現を考える。



②【Activity 1】参加した先生方が子供役となり、リーフレットを使って紹介し合う。



③【中間交流】良かったことや困ったこと、言いたかったけど言えなかったこと等を確認し、交流する。

「新教育課程を活かす『能力ベースの授業づくり』より 齊藤一弥・高知県教育委員会[編著]

- ・「日本の文化を伝える」という言語活動を、相手を替えて繰り返し設定していることが、見方・考え方の成長につながっていく。
 【授業づくりの視点 18-4】
- ・「やりとり」か「発表」か、単元目標と付けたい資質・能力を再確認し、言語活動を設定する。
 【授業づくりの視点 18-2】

講師：鳴門教育大学 中妻佳代 准教授より

- ・「言葉をください」ということは、子供の中に言いたいことがあるということ。こういう授業づくりが大切である。
- ・学習活動の1つ1つは素晴らしいが、単元の目標・評価規準とのずれがある。改善案としては、
 ①子供の実態や計画している学習活動に合わせた単元目標に変える
 ②単元目標に合わせた学習活動に変える
 ③観光客との交流活動は、発展的に総合的な学習の時間の中で扱う 等が考えられる。
- ・移行期間は、児童の実態、単元の目標や観点等に応じて新教材をうまく活用した単元計画を立てることが大切である。大宮小の指導法を参考にしつつ、自校に合った計画を立てること。
 (研究指定校以外は現行の学習指導要領の評価規準等に基づいた指導・評価を行うこと)
- ・自分だったらどうするかという考えを持って、次回の授業研究会に参加するとよい。

授業研究会は、7月2日 (火) 大宮小学校で開催します。【東部教育事務所】